

文恭院實紀

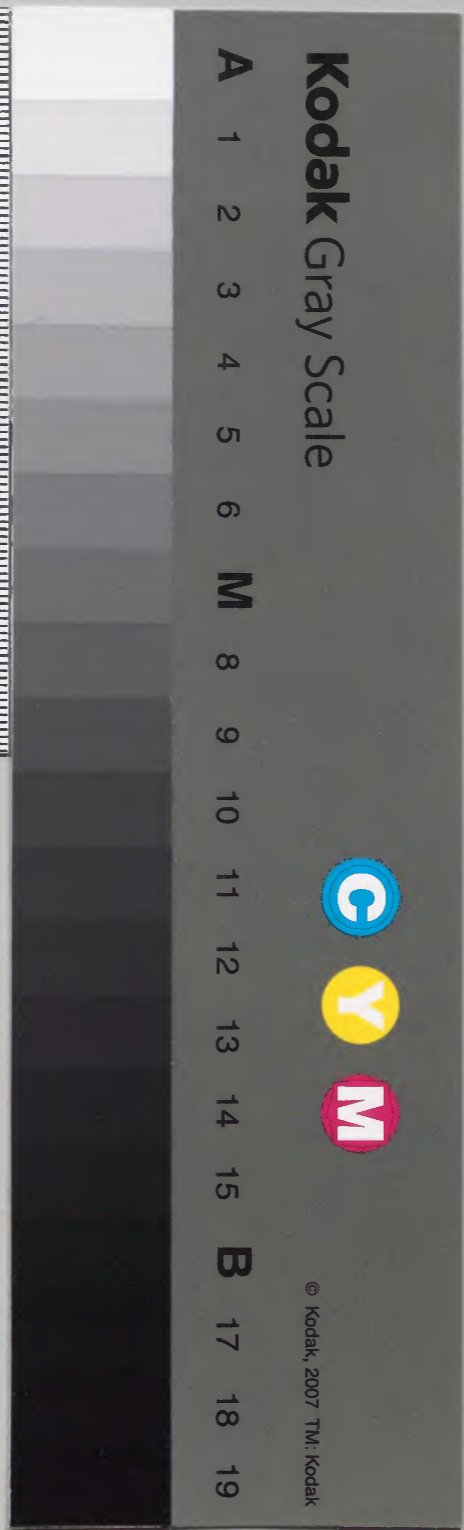
三十

庫	文	閣	內
三二函	一四五架	三六〇六四冊	和書類

庫	文	閣	內
四九函	一五五架	三六〇六四冊	和書類

享和元年辛酉
自正月
至六月

內閣文庫		
番號	和	36064
冊數	55	(30)
函號	149	36



文恭院實紀

三十

享和元年辛酉

從正月
至六月

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

文恭院實紀

三十

享和元年辛酉五月五日



文恭院實紀卷三十

享和元年五月五日 終日 二十九

享和元年辛酉五月五日 群臣以奉旨の御賀

臣侶の如し

一日三月旧より同し 薩曲の如し 規の如し

日 西系するいしめ 滴きりきりし 雁さくの

もの 福あり

五の 涙の 庭園より 始りきりきりし 小鴨

み 羽志 鴨一羽 雜鴨二羽 控持給

六日 僧侶祠友の相次 舊規より同

七日 伊勢代系 伊勢代系 伊勢代系 伊勢代系

大守下野 寺基 寺基 寺基 寺基 寺基 寺基 寺基

光山代系 伊勢代系 伊勢代系 伊勢代系 伊勢代系

大納言殿 伊勢代系 伊勢代系 伊勢代系 伊勢代系

城代 寺基 寺基 寺基 寺基 寺基 寺基 寺基

真の山 寺基 寺基 寺基 寺基 寺基 寺基 寺基

石河 寺基 寺基 寺基 寺基 寺基 寺基 寺基

登坂 寺基 寺基 寺基 寺基 寺基 寺基 寺基

たきふ

八日 东嶽山

嶽有院殿

澄心院殿 靈廟 戸田 末女 正氏 叔代系 以

九日 寺基 寺基 寺基 寺基 寺基 寺基 寺基

射 寺基 寺基 寺基 寺基 寺基 寺基 寺基

十日 东嶽山

諸廟西詣りて延らる

常憲院殿靈廟に安斎對り信長代奉

十丁。具呈の西祝例はおかしく中興當仙石次

兵兼久貞小姓組戸田大信氏昌南宮清三郎

正安西城小姓組井上仲正孝書院書石野新

左邊つ廣温中根部解由正長神尾安次郎元

孝初初初西城書院書業山十郎右兼つ陸佐使

書とある連歌ハハ恒例の事と一様お忘れ

國業へた系御代の事昌逸耕す氏の多し

御代 一言旨とふ隔廣くも明初系其阿又吹上の

西庭よしく弓場ハハあり射子のとるふ

庭の福お例よおあ

十二百三縁山

博信院殿靈廟は戸田采女正氏叔代系す

のふ射子の書すは徳重を徇ひて師小笠原

被次郎持歌よ射次と下さるこの日大塚護持

院権修山任りて家

十三日小松村の河より習法りて是を所略を
精りてふ所厨所ハ正福多りて餉集りてた
ちふ

十四日三縁山

文昭院殿靈廟に安着島馬守信成代事人傳
負古賀弥助朴杉接のりて精研りて何時と
編ふ

十五日月次のお亥例のみと一信侶祠官の

是日の亥より一今朝山王の社へ西例白
次甲斐守政隆代奉りて太刀を進進薦きりて
首を賀りて信山祠官の事多しこの日水英

門尾中持のりて一は英の所名一羽を供りてを
うきりて此日淑姫美以奉りて河を築城つて
きりて是西滞あり

十七日紅蓮山

御宮子戸田采女山氏叔代参り

二十日 东殿山

大猷院殿

有德院殿靈廟子戸田采女山氏叔代参り
空うさより小十人返へ入る一人この日
二十日 水戸門さようは春の層法うさ
よりさうの月り宿老は湯へ退るさうの日
丸小姓福村久米之助山采女料こる徳福ふ

二十四 三縁山

名徳院殿靈廟子安反爲了守信半代参り
東殿山

孝恭院殿靈廟子安反花おまを種用代参
す日光門山よりうさうさうさうさうさ
後山氏侍は使して磨常さうさ明の歌おさう
のゆさうさ對面の子をへつうさうさ
豫守瘡通沈田内近政春春向公の館侍を

家々子孫(宗)の由緒記を記すに及ばず

二十五年壬午春三月... 宗家の... 使

あり... 宗家の... 使

二十六年丁未春... 宗家の... 使

至心院殿靈牌... 宗家の... 使

代奉に

二十七年己未春... 宗家の... 使

御宮... 宗家の... 使

諸廟より諸あり御城よりハハの跡お羽書友友代

系すき家大友因幡書義方日光山より之り

禍す

二十八日月次のお祭例の... 松平お換書

高邦初て物討の... 唐馬を下り家閑

院伏見南家以承者の使者をよみ遠國の古僧

社費お見一たてまつり... 初定を新石川元近

将監右房重平殿時宗之羽織之目付羽衣

尤事つ止長至十夜阿保二羽強く之暇夫地の事
なりりて味給ふ

二十九、漢の危國よあつたら家出費のハ小鴨五
雜鴨一なり言家申條河内言信義と日芝門
臨公延法親王へ本有折務の料を法ふハ
さる

二十日ニ縁山は宿者ふりしハ延滞さる
ふり

有孝院殿靈廟に戸田米女山氏教代天守再
言よりて之家のうりはしてありしより
ふり
二月朔。白木書院におたあひ日光久能山
の古鏡條およみ存録つくとあたま山門惣
代日光山探代その代遠國台家の僧侶上野一
山の宿中えつたてあひる言大守下野も基奉
伊勢よりうり福は

二、大坂城代青山下野守忠裕明の日叢途に
より謁見し懇詞を納ふ西城旗を以て永井
監物白衆先免し寄合とある條衣觸例の
ぬし去りし九日は成の知り多村一書士二人阿
弥を納ふ相平左衛門督信充去月二十日相礼
の途中供立場原の上先菅子代りありて立ち
しおつへ供連の係ハリ奉り仰上さき置きし
は今よ改ぬハ等閑の存行ぬ方の多き事以不存

届の由又本多伊与守右衛門同し子を咎えらま
左衛門督信充伊与守右衛門^斎はまこつて海原を
候し心又動定ぬ哉源吉兼少果相前表は用を
りりしより引續帳表地の由用をりありてく
さし寄束の存行おつし西原立の條はあて不
埒の事より役義名故は目見以下前さき家
は麓ら家

三日三井寺提代より寺社の事ありといふ由

たまふこの日矣とて歡樂のは遊あり

四々西城目付山木若狭守山富本城まつり

徒以土屋常刀直弼城目付とある閑院伏

又ある家の使者所たまふこの日淑姫君本城

より尾郎へ物々連絡

亦有演の危固と承らるる連鴨を精治たまふ

尾張中將高祖々表方叔父松平益子徳綱尾

中納言宗徳ハ名古屋よりけりきりきりきりハ書

院番頭永井大和守直保とて吊懸とる不

七日喜達院宮侍者ハハ遠國の古信守所々

あふ

八日お義山

諸廟子に訪あり東嶽山

渡明院殿靈廟に松平伊豆守信明代々此

九日さよハ演固ハ放鷹のとよお射一書士

ハ阿ふくたまふ

十六日西城小姓廻田中久幸傍政信老免し
小善清とある徳重を賜ふ連歌師小銀三平
阿ふく羽織そく所たよひおあしかりし
うも賜物あり
十七日西城山
以宮に松平保正と信明代系以小善清医友
望月三仙彦好猷王一書籍のりうとて徳重
を賜ふ

十八日釋典より聖廟よ例平岡若徳と
相長代系一太刀馬資黄重一取西進薦あり
尾張中将高柳々使し松平義三勝徳うと
しにより所たつ孫ありしを謝したてまつら
ふ
十九日吹上よあしききき富士の大的を祝た
あふ

二十日东廬山

二十五年濱の庭園に成りきりて庭園を鴨狩
扱たまふ

二十六年東嶽山

玉心院殿重牌所より戸田采女正氏叔代奉す

二十七年吹上庭園より成りきりて

橋部くさくさを

二十八年月次の相賀例の志より宗野馬と奉

功よりめ就封のつとまよりつとまのこゝ内庭

妻より政環増山河内より正賢子より正寧ハ

しめて又いたてまつる日光山諸事社法理助

役つとめより石川主殿正宗師者左近将監

高免六郷佐渡より政速本林右兵衛佐忠賢おの

おの時銀十をたまふ小納戸正取より准より

石川筑前守安福本殿を

三月新の上巳の巫祝として二家のうらひ供

して一種一為をよりいりきりて日光門より

使し二種二荷をよひらき

二。日光山法華社修後助役つとめし石川

主殿師藤堂尤近将監高免六郷佐渡

寺改速本林右左衛門助右賛家人の白銀町

羽後おゆりの子差あり日山の花を

つと

三。上巳の祝規のこも

四。西城小姓黒川近江島盛胤子内匠使香花

五。左末の茶郷養子親し助茶親ハハメ又死

しと家つくもの六人西城苗守存三枝豊初

寺山老免しと家合とある養福例子同し

右寺兄習ふ藤井清次郎義知西城の美右寺

とある

五。

御基所演の庭園は遊いさふ尾濃勢水行

修築茶熱田素名渡海所理をりし幼空吟

味役銘末の三郎正徳を主役時郎二羽織を
いとまたまふ属吏と同

八日 東叡山

清光院殿靈廟より安永七年より信成代表す
蓮光院殿靈牌所よりは例より井花孫吉清寅
代系に備中国松山の城主板倉周防守徳政病
より致仕し其子左近將監徳政より領知五万
石をつらひむこの縁政は取周防守徳澄より長

男よしく兄日向守徳後より嗣子となり安永七年
二月二十七日家法より四月二十八日龍衣封を謝し
たてまつる日神元より明和八年の冬に取寄し
左近將監より但しゆり今の名よありつる天
明四年五月十五日奏若書となり八年六月二十
六日寺社の名行を急ぬ寛政十年よりより病
よりより碓を解んふとを請ひたてありし
よ寺社の後ハ四月二十六日ゆふさきよりハ

ふくひつて明のと—三月二十四日奏者の
るをを辞—この日致仕—この日大炊頭又ま
信正とありた免文政四年三月二日卒以と
—六十五

九日小普信を引相平淡路守信行目付小治孫右
弟つ正苗幼定吟味役園相ハ吉弟つ久網信奏
尾髪河後檢視のりつとめ—まよりをの
町原を編ひその他不承の孝福相若あり新書

朝山奈新十郎正輝老免—小普信とあり
彦彦を祝ふ細城匠右小野西育
大納言殿の尚薬師あり
十日小十人岩室等吉弟つ正易老免—小
善清とあり彦彦建例のあり—下送于系妙見
寺盛高本所弥勒寺住破—
十丁峰姫美山王の社西宮系行り白うも二
十枚薦め—又祝庶つ十五枚惣申く三十五

板下きふはうくさよ田安郎へまうききふあ
うくりのち陪從のともうふ席きしし祝
酒吸相を下ききその以下のともうきつる酒肴
を福ふ回しきりふよりみ取つるきししと
御存

巻の上より右束の替の方へ縁三斗把一程千
尺つ、同一方簾中へ一程千尺はらひさる回
しきりふより峰姫あむくより右束の替の方へ

縁三斗把白うき二十枚二程千尺同一方の簾中
へ紅白ちりめん十巻一程千尺近包あ君へ白
編緬二巻は干綱きく香院尼へ紅白ちり
めん二巻つらひさる。又家士はらめその他の女
中へ巻お紀子あきりきりきりあり
あ存より右束門替のうきへ編緬十巻鮮鯛
五例大久保豊前守忠漫しきはらひさる。又
右束門替のうきより峰姫のうきへ鮮鯛同一

卷中より同一品ををりてきりて系極備を
言久は名ををりてきりてり巻揚五

巻の上用人中山本門馬信徳養目小納戸
高崎近江守廣徳篁刀の役とてり同一
品三つたおいる

十二百東嶽山
信院殿冥廟より平伊豆守信所代系以小
普請より御座書院書よ入もの八人

十三百日門及安樂心院のまよりこころの所

宮系を候一昆布ををりてきりて貞孝院尼

法中納言重好に
水のり 鮮鯛を法にりてきり

十五百月次の相候例のまより一紀伊中納言治室

卿系親ををりてきりては西より銀五十枚花

おこりて候きり系よりて水黄門及公世子も

謝係とてりては西面ををりて松平豊治守高室

就封のいとよ給ひ松平左馬侍代無直松平頼河

中親賢系親以板倉内防中膝暖家継しと謝
執りもの以家士も相こをふもの多し小姓組も
以石河を以守貞通大坂城代引渡のりも
てうつり福すは側大久保豊前守右近衛忠子
波之助旗を以太田駿河守資信倍子表十郎資
寧使番井上仲之丞兼子相三郎中松勘解由
正長兼子主税兼山十郎右兼つ晴兼子兼子
寄合も未筑後守正兼子九助初尺一たてまつ

その他尚多し二の日清の友郎も兼と
らふ

大納言殿の回一はあしよしあきとるに
延滞をくふ

十七日 弘治四年

以宮は安藤殿の信年代参す

十八日 紀伊中納言治實は叔母兼其口重

偏御の兼女 實支封松平所記兼 保姫のうらまひ

うきうきいゝ小姓御書取山口の如き直良一
て吊懸きく不動定在行中川飛騨守右美回
し吟味役重海洲云境千秋川渠洛利道路
造化の子孫きく不動の日
其の上御城よわくくくくく

◆二十日一橋邸家司久田總殿以長考大目付
とあり佐渡より横田十郎六條延松一橋邸
家司とあり大納言殿治海々の方用向も兼ぬ

先子尚氏平塚伴實守者吉西城鑑奉行と
あり苗字在当山田禰波守利性先子尚氏
あり西城小姓者山橋磨守宣時苗字在當と
あり十郎六條延松一二名加秩ありて宣禄
五万石とあり又先子尚氏水野筑前守徳美次
病免しと寄合とあり大書田迄守者素つ
との与氏とあり
二十日小姓御書取佐野紀前守家行は供し

紀伊中納言治廣卿割中を問ハキテ氷糖一壺
と、く、く、く、く、この日淑姫天降首をわす
ぬ城に入らざる事

二十、二、鉄砲聲を初大村後右衛門守城
病免に先子尚且美田主言言寛火絨捕盗の
子免さる

二十四、東嶽山、
孝恭院殿灵廟に女老系極備前守言久代

参以未の中より

御基所外殿、
御基所外殿、

二十五、陸奥國中村の城主相馬因幡守祥
胤病より致仕し、その子禎信守樹胤子領
知六万石をつ、此祥胤、故因幡守怒胤
らと男、見とも世をまう、又、病、
よ、竜居と、ハ祥胤嗣子とあり安永六
年四月朔、初見したて、あつり七年十二月

十六の教爵して讃波と称して明三年十
二月二日父の譲りを受けのち今の名を改め
あふ致仕してのち彈正女弼にあつた文化
十三年六月二十四日卒以年五十二
二十八日書町薬園に葬らるる事し尾
郎西宮殿よりしてあふ寄合神保紀伊守長
孝若子四郎若素ついで父致仕して家つ
もの十六人たり

勅使

院使参着よりり尾張女正氏教して慰
勞せしあふ家にお角越前守廣孝誦てま
ふ
二十九の尾郎より家司出してあふのるを謝
しをりあふこの奉子あふ尾張所より火起り
敷街におよぶ
三十日持尚邸宅乃与若素つ紀峰細城なる所

とあるこの日吹上りて騎射を覧あり

四月朔、参向の上卿引見ありとて、**湊詰**者

第の大名言家法、**庇奏**者、**蜀**よりつゝのちりあり

白木書院へおたしひ

勅使勸修寺若大納言、**経逸**卿、**千種**若中納言

者政卿

院使平松宰相、**政卿**、**西**對面あり

禁裏より

あつ所へ、**西**太刀目録、**黄**重三枚

仙洞よりおあし、**く**黄重二枚

中宮よりもおあし、**く**黄重二枚、**ま**いり、**さ**り、**る**物

城つゝ、**回**一

墓の上は、**接**家、**諸**門公卿より、**相**さけ、**近**衛家よ

り、**ハ**、**淑**、**孝**、**あ**、**娘**、**つ**、**も**、**教**、**り**、**相**、**あ**、**り**、**て**、**回**、**一**、**く**、**は**、**承**、**る**

を、**回**、**ら**、**不**、**次**、**り**、**接**、**家**、**口**、**詠**、**白**、**高**、**内**、**侍**、**の**、**使**、**者**、**を**、**の**

を、**の**、**も**、**の**、**さ**、**い**、**け**、**て**、**見**、**一**、**た**、**て**、**す**、**つ**、**る**、**よ**、**く**、**公**、**々**、**より**

おき、け自のお契行りその家司お樂人振代
冠帽末度昨吉田三任の使申ておたしもの
さうけて尺一たて申るさう西對面滴し
よりき家大治右系大史基くして

勅使

院使のもとにをの境霧一茶橋一茶を證ふ
さう家まゝ大友因幡書義方しく明る申樂
あさうきしきしりさうのり観覽ある

いよより上仰つういさるぬ戸のあつてもは使
しき回しきを傳つて家

二万公卿饗食夜の敷樂ありぬ戸のあ卿はしの
溜詰諸弟の大名言家詰礼奏志書菊百
縁頼詰父子布衣以上法印法眼の^医医負おす
ちうりのり大廣百に出るまひ

勅使

院使は西對面さうきぬ戸のあ卿も回しき

西次伺候のともうと又一たてまつりては能
えしむへきよしを少老系極備前守言久し
申樂大夫へ傳つては樂組ハ翁ニ書申和布刈
徑政井尚望有祝言弓ハ備狂言ニ書申
り^首引あり奏者書内及豊前守信教舞臺
出て座院纏置あり要飾廣蓋例のふと
教樂中に席とよしと宮箱を初いその他の
事も一回

三方大坂町を以て成瀬因幡守正定を崎の
奉行とあるこの日目付大草大次郎公英書
子態翁公弼ハ父死し家つくりもの五人
有。
有海所白木書院はおたまひ

勅使

院使辞見あり
大内への西區相仰つき輝洛の両さま

初使あはせのし報るる後終る也

大納言殿より報る後

院使より報る也

大納言殿より五枚

巻の上より八千種つ時節十手折つて下り家

その他梅家門跡の使者もしりし人搦代冠

帽末廣師よりしりし縁ひ編おけり

又近邊内大臣の使者よりしりし

御巻所淑姫買よりとおかしく白紙を下

さる

六日日光門至り山より言家字系をいさ

義潔の供しりし時節をくくしりし是は對面

の子仰つてはき家この日王子筋一は故層と

てありしりし是維子十を捉たきふ少老堀田

梅は吉正敷陪居しりし維子之を捕たり

七日目付佐久百左系信近大坂町を捕り

あり同職惟原八郎成定佐源を以て
り先子尚政市尾丹後守房仲持尚政とあり
納戸郎伊東長吉懐祐吉目付とあり又右守
組郎藤原重十郎友政納戸郎とあり又右守
尾沼綱三郎信噴同組郎とあり又右守秋
山松之丞惟禰同組郎勤向と傳ふとあり
不

八日 赤坂山

洛陽院殿冥廟より安政對する書信成代奉目
光山

西宮代奉使

大納言殿の西使より相々言家左田備後守
氏侍おとすとの
冥廟代奉使内蔵大和守利以又奉祀の事
永井信濃守重方丹羽式部少輔氏昭重と
是とも又所在事不効相例正替らぬ日見之門主

西登山より入りまう此布くすは響念想とて

は對面あり

勅使

院使

御務者雍通池田内匠正甚まうのり老

戸は福一退く

九日御城の目付土屋帯刀屋直本城よりつ

り使者火災巡視をり

道御城の目付とあるこの日小普請お捕幸三郎

若順罪ありて追放するその他連及のもの

多

十丁の吹上のは庭に

あり

十丁の縁山

信院殿冥廟より戸田采女正氏及代参使

書村上三十郎正親書院書与近藤孫七郎

右東つて山方とて先子同邸とあり細城
小納戸て野権十郎雄行おあり小姓組務
殿十郎左衛門長尾とてに侍書とあり中興
當安者小信信次女二丸當守尾とあり
十二日使書者牧野靱負成傑火災巡視の事
急右とあり

十四日林寺坊古坂糸倉色雅雄族砲罫罫を
行あり學問所所事務書与以黒沢山助林を

とあり

十五日月あとの相契例のぬし松平筑前守高
廣松平伊豫守治好松平越中守定信松平阿
波守治昭細川越中守治年松平大膳太夫
音房とありの巻紙二十五人龜石の河とあり
取とあり不活巻ハ梅芳鶏八羽とあり五位三羽
水鶏七羽とあり御總息存ハ普門院とあり書翰
集とあり

十七日 卯 義山

所宮は此宿ありうくくとたまたまてのり

大納言殿より此宿あり 宿老太田備中守資

愛病より一 磯をえんを請ひてまう

るより一 戚族水野を改守忠詔めしと

後ありく保護つて以て一と中興小姓小條

筑後守氏乾よりあまらふ

十八日 不 時 朝 會 あり 松平紀俊も容住孫堂

和名守高疑も一の乾封の咄たおいふもの之

十一人 相馬讃波守樹胤家法を一を謝し執

り相以駿府守室重田近江守正延兼福以先

も尚郎の野をたまたま一系守磯を引とあり

小十人 以三浦和名守義和先の尚郎とあり

十九日 日光山 祭 祀 するあり 湯に一もより三家

のうきく一 伴して契しをら家この日小納言取

井るく即正扶病もて其の病を免さるあり

佛道院前火あり

二十日 东嶽山

大猷院殿 靈廟

涼徳院殿

至心院殿 靈牌あり 西福あり 西うくさあり

廟あり 福あり 太刀 重一枚 西をせ鷹あり 西家

戸田 備後守氏 倚日光山より うり 福以 祭祀

の 幸 行 永井 信濃 守 重方 丹羽 式部 女 輔氏 昭

うり 福以

二十三日 辰刻 姫君 西生 誕あり 西腹ハ おて 媽の

うり 西城 納戸 曾根 孫三郎 重辰 女あり 西養

目ハ

御 養 不 用 人 小 笠 系 大 隅 守 義 武 矢 取 ハ 子

孫 太 神 義 傳 以 不 少 川 系 小 納 戸 慈 翁 小 野 若 系

門 茂 用 篋 刀 を た て 歩 け ず

二十三日 ころの 不 姫 君 西生 誕あり 西家の あり

使し満語を家語に諸書に諸物に布衣の
少きまうのりり突しをり系演國のを形豊治
左名表武経吹上を形とあり第一は精細を褒
きりま(座班)緒取の次は其の如く其儘をいふ
しとあり)回流を形木村又助在之回しを形
とあり)作り下を形竹村七左表つハ大工取と
あり

二十四日 東叡山

7
レ
削
ル

孝恭院殿靈廟は代系仗よりすは産録より
よりてあり)白木書院はお多し布衣以上
寄合諸書士その他小吏小普請の輩の武技
は覧行り布衣以上寄合のともうふは酒吸物
を編ひその他の人々はおの布帛二反をたよ
ふこの日 東叡山
孝恭院殿靈廟は録中より代系ハより
きり

二十五日 吳語^医函^医峯^医游^医菴^医瑞^医真^医吳^医函^医とふ
る又さよふ湯^医尺^医をゆるさき一醫^医宋^医回^医玄^医書
何^医くくま石^医出^医さき福^医二^医る色^医をた^医まひ西^医陣^医吳^医
醫^医とあり元^医泰^医と改^医む

二十六日 書院書^医言^医未^医元^医京^医正^医雄^医おを一^医与^医路^医
ある西^医陣^医吳^医右^医幸^医福^医田^医在^医在^医安^医邦^医本^医城^医にう
つり同^医一^医兄^医智^医中^医山^医廻^医飛^医克^医匡^医西^医城^医の^医吳^医右^医幸^医
とある又表^医右^医幸^医演^医田^医三^医と^医互^医恒^医久^医馬^医郡^医勅^医有^医素

門^医右^医長^医吳^医の^医磯^医兄^医智^医ふ^医一^医と^医初^医と^医子

二十八日 月次^医の^医相^医賀^医例^医の^医お^医と^医一^医松^医平^医飛^医騏^医多^医利^医
考^医ハ^医一^医と^医乾^医封^医の^医所^医た^医ま^医り^医ふ^医もの^医二人^医飛^医騏^医守^医
利^医考^医西^医馬^医を^医し^医る^医系^医松^医平^医豊^医前^医書^医仲^医雅^医系^医親^医す
僧^医侶^医住^医後^医謝^医す^医もの^医二人^医如^医茂^医の^医相^医人^医葵^医を^医親^医す
弟^医ふ^医は^医生^医誕^医の^医姫^医吳^医七^医束^医の^医西^医祝^医より^医一^医と^医一^医
西^医存^医より^医松^医平^医伊^医豆^医書^医信^医所^医西^医使^医し^医と^医産^医衣^医二^医親^医衣^医
錦^医五^医十^医把^医二^医種^医千^医足

大納言殿よりお孫兵衛守忠友内使より同

二襲衣二十把一程千疋

御臺所より女房使より同二襲衣二十把

二程千疋おのりきききお名おのりきき身お

買と称しきり

御臺所の御やきききとあきかききとあ名たて

まつり少老系極備おききき久布帛を給

ひ墓目のつとめ

お臺所用人小笠系大隅守義武矢取その子

弥太郎義徳寛刀の役小納戸熊倉小野中束

茂田をのり銀町おを給ふ同り可祝子

お存より

大納言殿に一程千疋

臺の上に給二十把一程千疋

大納言殿より

御存

巻の上より一程子足

内巻所より

所所より二十把一程子足

大納言殿に一程千足あり又

所所

大納言殿

巻の上より淑路お姫のくく一橋田安お邸民
部々のくく及中の方貞孝系遠お尾久く

助本より近包お姫系産婦の方所取かへせ

あり一橋田安お邸民部御の方よりも産衣

一重一程つゝ家士くく歌不貞孝院尾よりも

回

二十九の三縁山

者孝院殿冥廟より所伝あり言家内及大和守

親以日光山よりくく得す

五月新の身姫君所事

淨土不西やしくあひと仰生さきしを祭し
三家のうらりし使あしきく不日光門全使し
端午のほ祝二種二若又姫君七束のほ祝とし
て一程をまいつききく不先き省以火絨捕盗を
いりし池田雅次郎政貞

禁裏附とあり納戸組以長崎源と助元良御城
の回し以とある
二の端午のほ祝としき三家のうらりしきしめ

例のともうき有本新寺より使しし時節を執を
らる

大納言殿まおおをし先子尚以同部内記若英火
絨捕盗のりあきり家

三の寄合新庄与惣若愚つ直内子芥七まきめ
父致仕しき家つくもの九人

五日端午のほ祝規のおとし

六日西城ほ信を以永田松次郎並茂一昨四

水鏡餉少一めさき一抄さけ相持方藤末
のすし心とくうらるにふり水鏡をくめ

不

七、細城先子尚以大河内善言悉以委平城
よりつり目付渡逸久能紀細城先子尚以を
不郡源流一人所たあふ

八日 东叡山

叡有院殿靈廟

心觀院殿灵牌所より法あり

澄明院殿靈廟より安養殿より信成代奉す

九日 讚州浄光寺喜朝同一の法然然寺住職

家とく不

十日 东叡山

常憲院靈廟に松平伊豆守信明代奉す

十一日 甲府新宮小善法より大書に入山の十

一人

十二万三縁山

博信院殿灵廟より松平伊豆守信明代系に御丸
表右幸福田六郎左幸つ堅備御城少老松平
能登守系保裏印の居し由借米より形跡失の
より一糸忽のありありとて過塞急をり不

十四万三縁山

文昭院殿靈廟より松平伊豆守信明代系す小
普請より御城小姓組より入もの八人

十五万月次の相契例の事と一井伊掃部頭
中松平源政守親係系親す松平隠政守定國
いゝめ執封の所たあふもの三人隠はる定國ハ
あ層馬を下さ系稲葉系丹後守正治西馬を下さ
系松平源河守親賢養子也と助親明初て
又つたてまつり佐渡守切増屋源八郎成定初
て赴任のいゝるたあふ御相ハ恒例より一回一災濃
尾張伊場三國川く水行普請まつて勘定うり

のともうとうり福す後州法徳も孝朝末老
一住職を謝す本存弥勒寺色衣を謝す
子

十六日西城目付永井靱負直亮本城よりつ
り中興寺杉浦大徳名後格名西門と改む西城の目付
とある

十七日西郷山
海宮

諸廟より詣あり

十八日西郷あり例のともうと視る子を乞うる

樂ハ氷室通盛赤山山姥雲雀山程々程々
末彦より相合為帽子子多ひと山伏あり

十九日僧侶若主も使僧者木山木も大吏時宗
編ひぬたあふ

二十日赤鹿山
大猷院殿

有徳院殿冥廟に戸田采女正氏が代奉り大坂
定書保科越前守正率、病免に

二十万、苗字居相浦越前守信程身姫君誕生
誕の事をりりしをもて、時節を納ふおかしき
にふり、奥方者二人銀を下さる

二十万、大坂破換を以野百重三郎成沈水十
人取とあり、寄合^医函千田玄知恭副寄函坂志
菴宗^之より、奥方者二人銀を下さる

二十万、播磨國赤穂城主本林右衛門忠實
病もて致仕し、その子右近忠哲二萬石をつ
く、この忠實ハ故和名守忠、洪り第二子より、あ
る、永九年四月二十九日、嗣子とあり、そのと、六月
朔日

淺水院殿に相福し、同年八月、立襲封し、十二
月十八日、從五の下し、伊豫守に任して、明六年
四月十三日、大内祀と改め、寛政元年の二月二十

二百右名傳佐享和元年五月二十四日隱退一
文政二年三月二十七日英濃書と何くく天
保六年月日不知率以是七十八為城裏門番
の以迄友助八郎義種老免しく寄合とある
町原を初ふ

二十四日三縁山

名徳院殿靈廟より平伊豆守信所代奉以東
處山より

孝恭院^殿靈廟より少老堀田按律寺正教代參以日
光門主山よりうつらきしくい言家大澤右末大
夫基くしく慰勞きくす

二十五日三家のうらみへは使しく巢雀を
くさきくふよくまうのりり謝しきく不又尾
郎より使しく巢雀巢雀鶏をのく二振さ
く

二十六日日光門主あうのゆるきは答應は生所

よしと内對面あり

◆ 二十七日遠江國横濱賀の城主細尾隱政が右
移率以長子右京亮忠善を以て所領三萬五
千石を執衣しむこの右移は故主の正忠常二
子あり兄播磨守右種父は先たちてうと
ハ嗣子とあり昭和三年二月朔日初見なり
その冬ぬ露しと山城守と稱し大正二年九月
二十九日家つよのうち今の名に改め四年五月

十ある奏者書とあり八年三月二十五年寺社
のるをりりことし四月三年五十六日
てうとぬ

二十八日大書与氏諸星以て通信豊細城裏
門當の改とあり

二十九日本月は祈禱の料より家前田信濃守
長祿しと張る夜をくくさる家出の日小姓細
尾亮太郎政温細城の小納戸とあり

三十日云縁山

有孝院殿靈廟に戸田米女正氏敬代奉に小姓

西尾元太郎政温細塚小納戸とある

六月朔日月次の相契例の末と一西尾隠岐守

老善木林右近右哲流よ多子巻物を款一籠衣封

を謝以

禁裏附池田雅次郎政貞初て卦任の服給ひ初

相重五枚肘羽羽後そく下さる

仙洞附大久保大隅守景素俾り詣えに

三石小納戸仔丹三郎右兼つ直純子七と助直

業ハ一の父死しと家はくもの六人この日小納

戸佐野龜五郎貴新小姓命とある

七の翁老太田備中守資貞愛さよよし病床よあ

りし今に懈らに再い請ふまに一懸板着

周防守徳暖めし磯ゆるさよ旧班よ者し

命さるるあめとあり名布衣より上のとともう

予傳つる不美濃尾張伊勢の國々川々普請
の事なりし劫定を行柳生主孫正久通
ハしめ不慮のともうと物お差あり

八日東處山

清明院殿冥廟に安返對する信成代系に父
の蔭して大書より書きようつるもの一人小普
法林源一郎学問所秘書組頭とせしむ

九日東處山

淨因院殿冥牌存に松平伊豆守信明代系に
十日出用よ入りしハ三家のうりし供まつ
と溜法言家信元奏者當りしものなりありし
起うかふぬ城殿別當村松四喜志山家尹病
よりし致仕とくハ嫡孫同後見智ふ万歳山
行家つる父の系後家とす家

十丁臨時の朝會何り日光門主使して撰考す
つとと異中のありしハ何ハ家増よる方丈より

も同く予もて生花熟瓜瓜を熟せしむる沼井雅
乐以忠道まじりの参親のもの十一人
十二の縁山

将信院殿靈廟まじりありけ日板橋御水車の
下より奇魚を獲りし長五尺一寸横二尺五
寸まじり四足あり僅ま三寸餘巨口微目まじり
魚身の色栗の如く恙と班有りまじりその名を
十三の沼井修理大夫右兼まじりの執封のいとま

たまはるもの三十一人寄合二人志田信濃守
幸專奉勅す大坂所を坊佐久万左京信
近初て赴任の所まじりふ雷討ゆりて備後ちと改
称はるの忠子右京信輝まじりてて見つたてま
つまじり駿河國府の所を新名瀬式部氏紀志良
の身行とあり使者より火災地巡察をいし
收御鞆負成條駿河國府の所を新とありこ
の日

所所より相平伊豆守位明公使

大納言殿へ西旗七流大馬印一本小馬印一本

鮮鯛一尾をまいたと云ふ

大納言殿より鮮魚をさくあら系

十五日山王の社へ西例本郷大和守泰行の使

と云ふ銀十枚を著あり

十六日嘉祥の祝規の古よりあり

境内火あり

十七日 弘義山

由宮にお慶賀言ふ信成代奉

十八日暑中を問はせらきて西例本郷大和

守泰行の使して日光門主に松重を

と云ふ使書お尋席之助名篤と増上寺方

丈へ同くおつういさ系 駒城小姓山本八十八本

城より川

十九日穿合函友園本玄治の奉り

香需教を執るつと名きつる

二十日 東嶽山

有治院殿靈廟子孫法あり

二十丁 美濃国高富の領主本庄甲斐守道利

病より致仕しその子近江守道留留よその

所領一万余石をつうむこの道利実ハ松平

對る守信より二男より山城守道揚り累子

とあり明和八年十二月十日家つよよめ十五

謝恩の日秘見しとてまつり亦八日叙爵し

伊勢守と稱しのうち今の名よあり多免安永

九年十月八日大書の際とあり寛政三年五月

二十四日伏見を移りつり七年十二月八日

奏者書とあり十二年七月十七日病に

歿を辭し事不致仕しその職部と改め

文化二年五月十三日卒す年五十二この日小

十人と臥宅三郎名嘉俊源病免に日門より

不忠池の蓮藕を熟らふ
二十二年大書榊系九右兼つ改範回十与改字
あり

二十三年西城小姓白浪加賀守改治中又の小
姓とあり小納戸田寛之五氏寧丁西城小納戸
山本清五郎茂村村ともり西城の小姓とあり
二十四年東城山

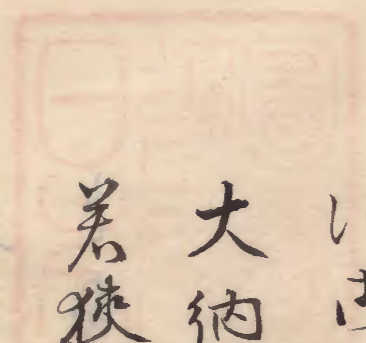
孝恭院殿冥廟に少女立花おき書程因代系

以新書筑山伊右兼つ貞暢老免〜小善法と
あり養老を編ふ

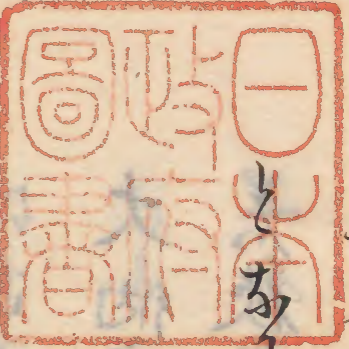
二十五年瑞午に時記熟り一三家のりり
ハハ例のともうふ本新書松平上総介高改
に込内書なとふ

大納言殿より新書をくくさる大書以証付
若狭守新伊右兼つ

二十七年松平和名守兼寛松平右兼亮輝



延奏者書とあり、松平日向子五昭大坂守馬



Handwritten text in seal script (sōsho) is visible but extremely faint and mostly illegible. It appears to be a collection of names or titles, possibly related to the library or the collection.

從奉天志書卷之三十一 松原府志卷之五 松原府志卷之五

松原府志



